

東海道五拾参次

橋本 たねひろ

48、阪之下一筆捨嶺 伊勢国・三重県亀山市

関から6.5km、急な坂を下ると阪之下宿に着きますが、その途中に鈴鹿川を挟んで溪谷があり、対岸の筆捨嶺が絶景で、室町時代の絵師狩野元信があまりの美しさに絵を画けず筆を投げ捨てたと伝えられています。

奇岩が並ぶ山肌に松が生い茂る筆捨山と、茅葺き屋根の茶屋で思い思いの姿で山を眺め乍ら休む旅人、茶屋に向かう土地の農夫と荷運びの牛を描いています。



49、土山一春之雨 近江国・滋賀県甲賀市



阪之下から9.8kmの土山へは、ゆるやかな下り坂で坂の途中から近江国に入ります。

絵は土山宿の手前、田村橋を渡る大名行列の先頭で、春の冷たい雨の中、また峠越えの疲れもあり、一様に合羽や笠でうなだれながら歩いています。

先導の侍に続く槍は本来まっすぐ立てねばなりません肩に担いでいます。

50、水口（みなくち）一名物干瓢（かんぴょう）

土山から10.6kmの水口宿は、農家を作る干瓢が名物です。

若い嫁が赤子を背負い、夕顔の実を抱えて持つて来る、ベテランの農婦がその果肉を細長く削っている、もうひとりはその果実を張り巡らした紐にかけて天日で乾燥させる、向かいの農家でも竹垣に干瓢をかけている、荷を背負った男が持っているのは、これも名物水口煙管でしょうか。

干瓢は真夏の強い日差しに2日間ほど干して出来上がるが、曇りだと品質が落ちるそうで、農家は天候に細心の注意を払いました。

近江国・滋賀県甲賀市



東海道五拾参次

橋本 たねひろ

- 51、石部一目川ノ里 近江国・滋賀県湖南市
水口から13.7kmの石部宿、石部を出て草津
に向かう途中に目川ノ里があり、葉飯と豆腐田楽
が名物でした。

「いせや」(伊勢屋)という茶店は、人足や旅
人らが足を止め休息して賑わっている、馬を
つないで馬子もお休みか、往来する旅人も
どうやら一息入れる様子だが、中には先に進みた
い様子の旅人もいる、街道の先には土地の農婦が子を連れ、俵を背負い茶店に
寄らずに歩き去っています。



- 52、草津一名物立場 近江国・滋賀県草津市

石部から11.8kmで草津宿に着く、草津名物「姥が
餅」は、小さな餅を小豆餡で包み、白餡で小さい突起を
付けたものです。

絵はその名も「うばがもちや」の店先で、かまどの横
で餅を作る職人、旅人達で混み合う店内、外には駕籠や
馬、左端に立てかけた長槍、と繁盛ぶりを描いています。

街道では荷運びの人足と早駕籠(5人がかりで走り通
す駕籠)が行き交い、右奥の矢橋道は水路で大津へ向かう道です。

